

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530889

研究課題名(和文) 幼児の共食時における人間関係の育ちとその援助

研究課題名(英文) Young Children's Human Relationships and Teachers' Support at Lunch Time

研究代表者

日浦 直美 (HIURA, Naomi)

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：80181056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：「食ること」は、人間生活の基本的行為の1つである。幼少期の集団生活での共食は、子どもの生活を豊かにすると共に、子どもが不適応やつらさを経験する場にもなりかねない。本研究での調査結果から、特に幼稚園から小学校への接続期には、幼稚園・小学校それぞれの場での援助・指導を踏まえたアプローチが求められ、家庭との連携が重要であると言える。

本研究を通して、幼稚園、小学校のいずれの教員も、共食時を食育の機会として有効に活用しているとは言い難いことが示唆された。共食が子どもの育ちにとって重要な経験であるなら、共食事への教員の配慮は必須であり、これまでに以上に意識的にその中身や方法を検討する必要がある。

研究成果の概要(英文)：Eating is one of the fundamental acts of a human life. Eating together with others in the group is important experience for a young child, on the other hand, may also be hard experience. From the results of this research, the teachers' supports at the transition stage from kindergarten and elementary school are very important. They must be based on way of thinking concerning with supports and instruction at each place, and cooperation with parents is also important at this term. It was suggested that most of teachers cannot think that eating together is effectively utilizing as an opportunity of SHOKUIKU. If eating together with others is an important experience for a child's growth, considering how to support their human relationships at lunch time is indispensable.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼児 共食 人間関係 保育者 援助 食育 小学校 給食

1. 研究開始当初の背景

(1)子どもが育つ環境の変化と就学前教育・保育施設の役割

少子化、核家族化、女性の就労率の増加、ワークライフバランスの見直し等を背景として、子育てという私的営みを公的・社会的枠組みで捉え直し、家庭内外の子育てを支援していくことが社会的課題となっている。このような状況の中で、就学前教育・保育施設では、預かり保育、延長保育が実施され、幼児が家庭外の教育・保育施設で過ごす時間は以前に比べ格段に長くなった。特に家族が共に食卓を囲むことを通して感じる共感や連帯感の実感体験は、幼児の生活から量的に減少しつつあるのが現状である。このことは、幼児が従来、家庭生活での人間関係を通して身につけていた知識・態度・技能の習得について、家庭外の就学前教育・保育施設が補完していく必要性を示している。

(2)教育・保育施設での共食と社会性の育ちに関する研究および保育者の援助の検討の必要

家族に対する共感や連帯感と仲間や保育者に対するそれは、当然異質のものではあるが、就学前教育・保育施設での食事場面を通して、他者と楽しさを分かち合ったり、つながりを実感したりする経験を通して、幼児の人間関係が豊かになり、社会性が育っていくことが期待されている。しかし、その実態と保育者の意図的援助の中身については、渉猟する限りこれまでほとんど明らかにされていない。就学前教育・保育施設での共食と幼児の人間関係に関する研究は、過去10年の報告を概観した結果、わずかに外山(2000)と高橋(2006)の報告のみである。

一方、就学前教育・保育の現場では、平成17(2005)年6月に食育基本法が成立して以来、「食育」という言葉の広がりと共に、食に関

する教育が保育者の関心を集めている。幼稚園教育要領や保育所保育指針が、人間関係を通して「食べる」ことや「食べもの」について主体的にかかわりながら体験的に学ぶことを強調しているにもかかわらず、保育者の一番の関心は「食べる」ことや「食べもの」を通して人間関係を築くことの方にある(今津屋,2008)。このことは、保育者が、子どもたちの人とかかわる力が希薄になりつつあるという危機感から、食育基本法の施行後、「食育」に人間関係や社会性の育ちを期待する傾向にあることを示している。また、保育者の間では、集団生活での共食が幼児の仲間関係に影響を及ぼすことについては、経験知として共有されており、保育者がその効力を保育方策として活用することもある(日浦,2007)。ところが、多くの保育者が共食場面に幼児の仲間関係に関する教育的意義を期待し、しかも、このことに焦点を当てた実践まで行っているにもかかわらず、集団生活における共食時の援助に関する研究報告は皆無である。また、共食時の保育者の援助に関する明確な指標もなく、食事の「楽しさ」に関して、指導上のとまどいもあるのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、就学前教育・保育施設における共食が、他者への共感や連帯感をもつ機会としてどのように機能しているか、幼児期の共食と人間関係の育ちに関する教育的意義を把握し、その結果をもとに、共食時の援助の指標を検討して、保育者養成や現職教育に生かすことである。

具体的には、

(1)幼稚園5歳児クラスでの食育と共食事の

援助の実態を把握し、その課題を検討する
(2)小学校1年生クラスでの食育と共食事の指導の実態を把握し、その課題を検討する
(3)幼稚園教諭および保育者志望学生の食事の実態を把握し、その結果と指導内容の関連を考察する。
以上、(1)～(3)の調査結果に基づき、保育者養成の課題を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

4年間の研究期間で、定量的調査と定性的調査を実施し、研究課題に取り組む。具体的には、

- (1)幼児期から児童期の共食時における食事指導の実態把握のための定量的調査
 - (2)教育・保育現場での共食時の仲間や保育者との関係性の育ちを捉えるための定性的調査
 - (3)保育者および保育者志望学生の食生活と食事指導の関係を検討するための定量的調査
- 以上の調査結果より、幼児期の共食と人間関係の育ちに関する保育者の援助について考察し、保育者養成の課題を検討する。

4. 研究成果

(1)兵庫県下の幼稚園の食育および共食の援助の実態

幼稚園教諭の食育および共食時の保育者の援助の実態を把握し、子どもの人間関係の育ちから食育の実践状況を捉えるために、兵庫県下の公立および私立幼稚園(694園)の5歳児クラス担当者を対象に、質問紙による定量的実態調査を実施した(2011年1月)。

その結果(回収率50%)より、共食時の援助の特徴を整理し、「楽しい食事」に関するキーワードから、保育者が子どもの人間関係に

焦点を当てた援助を行う背景を検討し、以下のことが明らかになった。

幼稚園教育要領の健康領域に食育の言及はあるが、各園での食育の指標とするものにはばらつきがあった。

給食の実施率は54.0%で、そのうち、業者委託が46.9%であった。業者委託の場合、園での食事の方針をどのように伝えるのが課題である。食事場所は保育室(89.1%)、食事の開始は「一斉に始める」(94.6%)、食事時間は「30-60分」(71.7%)が最も多く、幼稚園での共食は、ほぼ形が決まっているように思われる。食事時の座席は、固定席が47.0%、不定席が30.2%であった。

栄養指導に養護教諭が関わっている園が比較的多かった。

保育者は共食時の意義について「子どもの人間関係上、マナーを教える大切な時間である」(79.8%)、「他の時間と同様、保育者の意図的なかかわりが必要である」(73.4%)、「子ども同士の仲間関係を深める大切な時間である」(69.8%)と考える傾向にあった。

これらの調査結果を、日本家政学会第63回大会(2011)で発表した。

以上の結果は、研究者らが、2009年度に実施した調査(兵庫県下の全認可保育所の5歳児担当の保育者を対象とした、保育所での食育および共食時の援助に関する実態調査)の結果と非常に類似しており、これらの調査から明らかになった共食時の保育者の援助の傾向や特徴を、子どもや保育者自身の人間関係を視点としてまとめ、スウェーデン、イエテボリ大学で開催された世界幼児教育・保育機構(OMEP)の第26回世界大会で発表した。

これら国内外での学会発表は、関係領域の研究者との情報交換の機会となり、本研究を遂行する上で、非常に有意義であった。

(2)兵庫県下の小学校における食育と指導の実態

兵庫県下の全小学校の1年生クラス担任を

対象とした小学校での食育および給食時の指導に関する実態調査を実施し(2012年1月、回収率47.3%)、特に食育の実施状況と共食時の教員の指導について検討した。

小学校での食育の取り組み・進め方については、以下のような結果を得た。計画づくりに取り組んでいる(91.9%)、食育の評価を行い、その後の計画・実践に活かしている(51.6%)、給食の時間に食に関する指導をしている(91.4%)、地場産物の活用をしている(84.2%)。

食に関する指導の目標としては、多い順から、「給食時に感謝の心」、「食事の重要性」、「心身の健康」、「社会性」、「食文化」、「食品を選択する能力」となっている。

給食の場所は、教室(85.3%)、ランチルーム(7.6%)である。

給食の意義について、教師は、「子どもの人間関係上、マナーを教える大切な時間である」(83.7%)、「他の時間と同様、保育者の意図的かわりが必要である」(67.1%)と考える傾向にある。

以上の調査結果を日本家政学会第64回大会(2012)で発表した。

上述の実態調査は、本研究目的の遂行上、就学前教育・保育の内容と就学後の小学校教育の内容とが、いかに連携しているか、その実態と課題を知るために必要かつ重要な資料を提供するものである。

(3) 保育者および保育者志望の学生の食生活と食事指導の関係

将来、教育・保育現場で食育を指導する立場になる兵庫県下の私立大学教育学部教員・保育士養成課程に学ぶ4年生(118名)を対象に、食育に関する知識や意識、彼ら自身の食生活の実態に関する質問紙調査を実施し(2013年1月)、特に共食時の援助の傾向について考察した。その結果、以下のことが明らかとなった。

子どもが食事を楽しんでいることの指標

として、仲間と美味しさを共感する、笑顔で食べる、会話を楽しむこと等を挙げている。

家庭外の集団生活の場で共食は仲間関係、マナー等、人間関係の育ちと関係があると考えられる傾向にある。

「楽しい食事」のキーワードは、人間関係に分類されるキーワードが比較的多く、これは回答者が、子どもたちを見て「食事を楽しんでいる」と判断する視点と重なっている。

以上の3点が、先に実施した保育者を対象とした調査結果と同様の傾向であるため、これらの事柄に関する保育者のとらえ方は、現職を通して培われたものではないことが示唆された。

(4) 食育の現状と保育者養成の課題

これまで実施してきた量的調査結果を補うために、より詳細に共食時の援助の実態を把握する目的で、幼稚園と保育所の5歳児クラスでの共食時の参与観察を行い、同時に保育者(クラス担任の幼稚園教諭および保育所保育士)に対して、保育の意図や環境構成の工夫等をたずねる半構造的インタビューを行って、意図された保育計画と子どもの人間関係を探った(2014年1月)。

以上の4年間の研究成果をまとめ、報告書「幼児の共食時における人間関係の育ちとその援助」を作成した。

以上の手続きを踏まえ、幼小連携教育カリキュラム(兵庫県姫路市)を参考にしながら、特に幼小連携の視点から、接続時の共食時の援助・指導の課題を検討した。図1と2は小学校スタート時の指導のポイントを、幼稚園・小学校での援助・指導の実態を踏まえ、整理したものである。

図 1

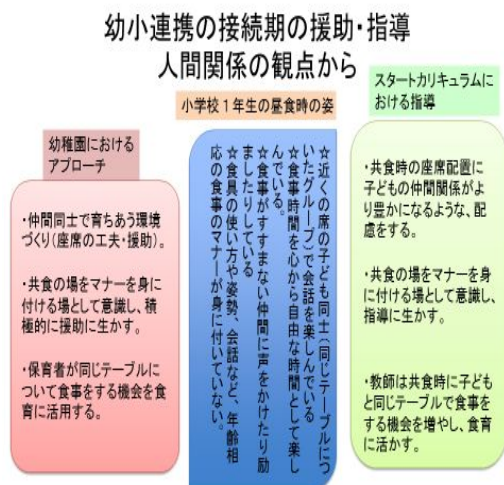
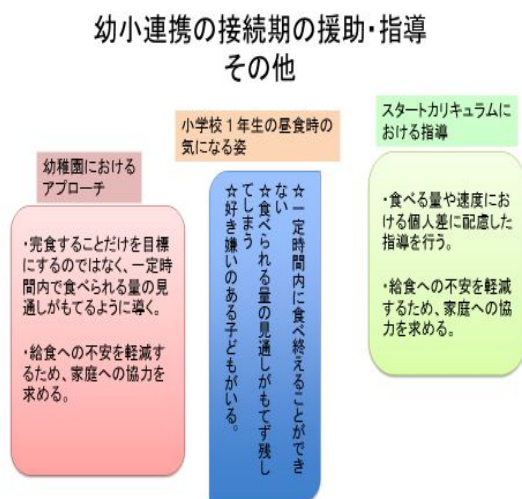


図 2



「食えること」は、人間生活の基本的行為の1つである。幼少期の集団生活での共食は、子どもの生活を豊かにする一方で、子どもが不適応やつらさを経験する場にもなりかねない。本研究での調査結果から、特に幼稚園から小学校への接続期には、幼稚園・小学校それぞれの場での援助・指導を踏まえたアプローチが求められ、家庭との連携が重要であると言える。

本研究を通して、幼稚園、小学校のいずれ

の教員も、共食時を食育の機会として有効に活用しているとは言い難いことが示唆された。共食が子どもの育ちにとって重要な経験であるなら、共食事への教員の配慮は必須であり、これまで以上に意識的にその中身や方法を検討する必要がある。共食時の保育者の援助の指標をさらに具体的に示すことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

今津屋直子・日浦直美 幼児期の食育と共食時の人間関係(1) 教育学論究 関西学院大学 2013 pp.39-46 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

日浦直美・今津屋直子 大学生の「食育」に関する式と食生活の実態 日本家政学会第65回大会 2013.5.18 東京 昭和女子大学
今津屋直子・日浦直美 小学校教諭の「食育」に対する意識と実践の実態 日本家政学会第64回大会 2012.5.12 大阪 大阪市立大学

日浦直美・今津屋直子 幼稚園教諭の「食育」に対する意識と実践の実態 日本家政学会第63回大会 2011.5.28 千葉 和洋女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日浦 直美 (HIURA, Naomi)
関西学院大学・教育学部・教授
研究者番号：80181056

(2) 研究分担者

今津屋 直子 (IMAZUYA, Naoko)
関西学院大学・教育学部・教授
研究者番号：70309441